

ソーステイン・ヴェブレンは猫を飼っていたか  
——『有閑階級の理論』における進化論と文化論——

吉 田 量 彦

東京国際大学論叢 人文・社会学研究 第5号 抜刷  
2020年（令和2年）3月20日

ソーステイン・ヴェブレンは猫を飼っていたか  
—— 『有閑階級の理論』における進化論と文化論<sup>1)</sup> ——

吉 田 量 彦

**Did Thorstein Veblen Keep a Cat?**  
— Evolution and Culture in *The Theory of the Leisure Class* —

YOSHIDA, Kazuhiko

Abstract

In his pioneering work *The Theory of the Leisure Class*, Thorstein Veblen researches various aspects of human behavior in modern industrial society and describes its key feature as conspicuous consumption: Modern people, now largely liberated from extreme poverty, are increasingly using various products not only to satisfy their vital needs, but also to simply show other people that they can afford such products. Veblen tries to describe a cultural-historical process in which this behavioral pattern gradually prevailed, calling it “evolution of institutions”.

The present article aims to clarify what Veblen’s concept of the theory of evolution looks like in *The Theory of the Leisure Class* and how it must be interpreted if this work does not contradict his other works. Unlike some interpreters who attempted to understand the theoretical dynamics in *The Theory of the Leisure Class* by supposing two opposite principles, i.e. conspicuous consumption and instinct of workmanship, I take a monistic position and interpret conspicuous consumption as a degenerate variant of the instinct of workmanship.

*Keywords:* evolution; leisure class; Thorstein Veblen; vicarious consumption; workmanship

目 次

0. はじめに—「身代わりの消費者」としてのペットたち
1. 本稿の構成

2. 『有閑階級の理論』における「見せびらかしの消費」と「身代わりの消費」
3. ヴェブレンと進化論, ヴェブレンの進化論
4. 『有閑階級の理論』はどういう意味で「さまざまな制度の進化についての」研究なのか
  - 4.1 「制度」とは何なのか
  - 4.2 「制度の進化」の原動力は何なのか—製作者本能と、そのさまざまな変異
5. おわりに—ソーステイン・ヴェブレンは猫を飼っていたか

## 0. はじめに—「身代わりの消費者」としてのペットたち

日本列島全体で住民の高齢化が進んでおり、それは東京国際大学が2つのキャンパスを構える川越市霞ヶ関地区でも変わらない。筆者は大学から徒歩10分ほどのアパートに住んでいるが、平日休日昼夜を問わず、周囲には高齢者の姿が目立つ。<sup>2)</sup>

人間だけでなく、人間が連れているペットたちにも、高齢化の波が押し寄せている。<sup>3)</sup> 足取りの覚束なくなった飼い主と、足取りの覚束なくなった犬が、お互いを引きずり合うようにして日課の散歩をこなす。そういう光景を大学周辺でもよく目にする。

年を取ったペットには金がかかる。というかそもそも、ペットに金をかける文化が日本社会にここ数十年で急速に浸透したからこそ、ペットたちがその分長生きするようになったのだろう。<sup>4)</sup> 厳密さを要する話題でもないので個人的な記憶に頼るが、筆者が幼少期を過ごした1970～1980年代の北関東の田舎町では、ペットたちはおおむね家庭の残飯で飼われていた。近所のスーパーやホームセンターには、確かにペットフードが売られてはいたものの、品数はせいぜい種類か二種類で、わざわざ金を払って購入する人はあまり見かけなかったと記憶している。医療面でペットに金をかける機会といえば、法的に義務づけられた、保健所での狂犬病の予防接種くらいが関の山であった。それが今では、ごく普通のスーパーにも多種多様なペットフードが置かれるようになって久しく、動物病院も人間の病院に負けなくらいあちこちに林立している。健康保険制度が整備されている人間と異なり、ペットを病院にかからせる飼い主たちの経済的負担は、決して小さくないものと思われる。

犬や猫が自分で財布を握りしめてスーパーや動物病院に出かけていくわけではないから、こうしたペットたちを厳密な意味の消費者と呼ぶのは問題かもしれない。にもかかわらず、スーパーで売られているペットフードや、動物病院で提供されている医療品および医療サービスを消費しているのは、まぎれもなくこれらの動物である。それに対価を支払っているのは彼らの飼い主だから、ペットたちは主人の経済力を背景にして、いわば主人の身代わりに消費を行っていると言えないこともない。

19世紀後半から20世紀前半のアメリカで数奇な生涯を送り、「経済学者には社会学者と呼ばれ、社会学者には経済学者と呼ばれた」<sup>5)</sup> 異端の経済思想家ヴェブレン (Thorstein Veblen: 1857-1929) が、代表作『有閑階級の理論 The Theory of the Leisure Class』(1899) のなかで、まさしくこうした消費行動(?)を「身代わりの消費」と呼んでいる。身代わりの消費とは、『有閑階級の理論』を一躍有名にした分析ツール「見せびらかしの消費」の一形態であり、消費者本人の経済力ではなく、本人と何らかの意味で縁続きの、他人の経済力を見せびらかすための消費行動のことである。ヴェブレンによれば、「見せびらかしの消費」が「身代わりの消費」という形態をとりうるからこそ、消費行動を通じた見せびらかしの規模も範囲も、個々の消費者という狭い枠を超えて、ほぼ無限に膨らんでいく可能性をもつのである。<sup>6)</sup>

## 1. 本稿の構成

『有閑階級の理論』は、高い知名度を誇り、娯楽読み物的な意味でのリーダビリティも決して低くない割には謎の多い著作である。とりわけ、さりげなく付加されている「さまざまな制度の進化の経済学的研究 An Economic Study in the Evolution of Institutions」という副題（下線部強調吉田）には、一つの謎が隠されている。<sup>7)</sup> この著作の中で提示される「有閑階級」「見せびらかしの消費」「身代わりの消費」といった概念装置は、後ほどその一端を示すように、各論的には、現代産業社会に特徴的な消費行動を分析するのに今日なお有効と思われる。ところがそうした各論的分析から距離をとり、全体の理論構成を俯瞰しようとする、ヴェブレンの「研究」の何がどう進化論的なのか、たちまち判然としなくなる。要するに、一つ一つの議論は面白いのに、全体として何が言いたいのか大変整理しづらい著作なのである。

本稿の狙いは大きく分けて二つある。一つは、『有閑階級の理論』で提示された「身代わりの消費」という概念装置を現代社会のさまざまな消費行動に当てはめることにより、ヴェブレンの着想の射程の広さを再確認することである（第2節）。はじめにも触れた通り、ヴェブレンによれば、経済的余力を見せつけるために行われる「見せびらかしの消費」は、見せびらかしたがついて本人が消費の直接の主体でなくても成立するし、むしろ本人以外の他人が代わって消費することで「見せびらかし」の規模も範囲も飛躍的に拡大する。こうした「身代わりの消費」の西洋社会における伝統的な担い手として、『有閑階級の理論』では使用人（雇い主の経済力を見せびらかす）、女性（実家や夫の経済力を見せびらかす）、聖職者（教会組織の、ひいては神の経済力を見せびらかす）といった存在が例示されているが、他にも子供（親の経済力を見せびらかす）やペット（飼い主の経済力を見せびらかす）、会社員（会社の経済力を見せびらかす）など、現代社会における類例はいくらでも見つけられるだろう。このうちペットについては、ヴェブレン自身が『有閑階級の理論』で詳しい（しかし馬鹿馬鹿しい）考察を行っている事実鑑み、本稿の締めくくりに独自に節を設けて取り上げてみることにしたい（第5節）。

もう一つの狙いは、『有閑階級の理論』全体の理論構成を、「制度の進化論」というヴェブレン自身が（少なくとも初版刊行時に）与えた規定を尊重しつつ、他の著作との整合性を損なわないように解釈しなおすことであり、こちらの方は数段面倒な試みとなる。順序としては、ヴェブレンが接触・吸収したと思われる同時代の進化学説の特徴を押さえたのち（第3節）、『有閑階級の理論』がどのような意味で進化論的発想に基づいた著作といえるのか批判的に検討する（第4節）。あらかじめ述べておくと、ヴェブレン自身が『有閑階級の理論』で提示しているように見える「製作者本能」と「有閑階級という制度」の二元論は、後者を前者の一変異形態とするある種の一元論へと修正しない限り、その後の著作との整合性を保てなくなるように思われる（第4節2項）。

## 2. 『有閑階級の理論』における「見せびらかしの消費」と「身代わりの消費」

『有閑階級の理論』本文は、次のような一文で始まる。

「有閑階級という制度がその最高の発展を遂げているのは、たとえば封建時代のヨーロッパや封建時代の日本のように、野蛮時代の文化が高度化した段階においてのことである」<sup>8)</sup>

いきなり日本が出てきて驚かされるが、そこはひとまず問題にしない。有閑階級 *leisure class* とは、階級 *class* という言葉が入っている以上、元々は特定の社会階層を示す用語であったはずだが、ヴェブレンはこれを「制度」として分析し、<sup>9)</sup> 人類社会におけるその起源、発達・拡散過程および現状を明らかにしようとする。そうした制度としての有閑階級を象徴的に代表する行動として、さまざまな実例を交えつつ繰り返し取り上げられるのが「見せびらかしの消費」である。

有閑階級の思考に取りつかれた人たちは、「労働の回避を顕示すること」を目指すヴェブレンは言う。<sup>10)</sup> つまり自分たちがひま *leisure* をもてる社会的・経済的境遇にあることを、言いかえればその活動時間すべてを直接的な生産活動にあてなくても暮らしていける境遇にあることを、さまざまな消費行動を通じて周囲に見せびらかそうとするという。これが見せびらかしの消費である。具体的には、彼らは再生産のための必要をはるかに上回るカロリーを摂取して肥満したり、<sup>11)</sup> 自分でやれば無料あるいは安く済むことをわざわざ使用人を雇ってやらせたり、生産活動に不向きな、というかむしろ邪魔な装飾性の高い商品を身につけたり、住居に飾ったりする。

ヴェブレン自身の挙げている例ではないが、たとえば同じ腕時計でも、国産の大量生産品とスイス製の高級品では、きわめて大きな価格差がある。時刻を知る目的なら量産品で済むところを、あえてその数十倍、数百倍の金額を投じて高級腕時計を身につける人がいるのはなぜだろうか。それはローレックスの方がカシオやセイコーより正確に時を刻むから、というわけでは断じてなく、ヴェブレンに言わせるなら、「価値の高い財を見せびらかすように消費することは、有閑紳士が名声を獲得するための手段」だからである。<sup>12)</sup> 材質が貴金属だったり、文字盤に宝石がちりばめられていたり、有名デザイナーがデザインを引き受けていたり、高級腕時計は時計としての機能から見れば無駄な理由で値段が高く、しかも無駄に高いことを誰もが容易に見てとれる。したがって、これを購入して身につけていけば、自分が単なる時刻確認という実用目的以上の商品を買う「余裕」があることを、周囲に効率よく見せびらかすことができるのである。

しかし「手元に富が蓄積されてくると、当人自身の努力だけでは豊かさを十分に証明できなくなってくる」とヴェブレンは言う。<sup>13)</sup> 仮に高級腕時計を何本でも購入できるような「豊かさ」があったとしても、一人の人間が左右の腕にローレックスを10本ずつ巻いて生活することは不可能である（物理的には可能かもしれないがあまりにも不便だし、それ以前に知性と品性を疑われる）。とはいえ「適切な量と質を消費することができなかつたら、それは劣等と汚点の刻印になる」<sup>14)</sup>、つまりケチだと思われて見くびられることになるから、こうした人は自分の財力に見合った見せびらかしの消費を行うため、自分一人で消費しきれない財を、自分の身代わりとしての他人に消費してもらうことになるという。そして後者は、前者の身代わりに消費行動を行うことで、前者から見れば自らの経済力を見せびらかすための手段となる。これが見せびらかしの消費の中でも、特に「身代わりの消費」と呼ばれる消費行動である。ごく原始的な例としては、他人に「高価な贈り物」を贈ったり、他人を「贅を尽くした宴会」に招待したりするといった行動が挙げられているが、<sup>15)</sup> たとえば前段で言及した、他人を臣下や使用人として継続的に雇用するといった行動も、身代わりの消費の一例に転用されている。ひとから羨ましがられるほど完璧な臣下や使用人となると、身なりを上品に整え、複雑怪奇な礼儀作法を習得し、高度な専門性や知識を身につけていなければならないが、そうしたことはおびただしい時間的・金銭的余裕をつぎ込まなければ不可能だからである。<sup>16)</sup> 要するに、まず雇用して一から教育するにせよ、高度な教育を受けた人を後から雇用するにせよ、大変な費用がかかるというのである。

『有閑階級の理論』では、こうした身代わりの消費および消費者の実例として、さらに女性や聖職者に取り上げられる。ヴェブレンによると、欧米社会は女性を「家畜的動産 *chattel*」とみなす

古代の家父長制的伝統の延長線上にあり、<sup>17)</sup> そこでは女性にきらびやかな消費をさせることがその父（未婚女性の場合）や夫（既婚女性の場合）の経済力を見せびらかす格好の手段となる。しかもこうした消費が本人の楽しみのためではなく、あくまで別の誰かの経済力を見せびらかすための身代わりの消費であることを念押しするかのように、明らかに女性本人の楽しみになるような消費行動（たとえば酒・タバコ等の嗜好品の享受）は、欧米社会では長きにわたりタブー視されてきた。<sup>18)</sup> また、きらびやかな法衣や祭具に囲まれた聖職者の生活も、それがあくまで聖職者本人の楽しみのためではなく、神や教会の力を見せびらかすための身代わりの消費であるからこそ、さまざまな禁欲的で不快な戒律や苦行に縛られているという。<sup>19)</sup>

ヴェブレン自身のこの部分の記述がやや取り留めのないものになっていることから分かるように、わたしたちはこうした身代わりの消費・消費者の例を、わたしたち自身の周囲にいくらかでも見つけ、いくらかでも付け加えていくことができる。例えばヴェブレンは子供を大変な金食い虫と考え、社会の中間層（上層ほどの「余裕」はなく、かといって下層ほどなりふり構わず働かなければならないわけでもない）ほど「恥ずかしくない」生活水準を維持しようとするため子供の数は少なくなるという奇妙な論陣を張るのだが、<sup>20)</sup> 逆に言えば金食い虫である子供は、それぞれの家計の身の丈に応じた消費行動によって、親の経済力を映す鏡となる。つまり子供も立派な身代わりの消費者である。わたしたちが「はじめに」で扱い、第5節で再び取り上げるペットも、この延長線上で身代わりの消費者として位置づけられるだろう。また、ヴェブレン自身は特にそういう視点から論じてはいないが、現代産業社会を特徴づける営利企業なども、身代わりの消費の実例には事欠かない組織と思われる。会社で「きちんとした身なり」を要求されるという理由で、値の張るスーツやジャケットに給料の一部をあてているサラリーマンは、会社の看板を背負った身代わりの消費者といえる。運転手付きの高級車を乗り回す同じ会社の経営者も、見方によっては、会社を動かしている資本の潤沢さを見せびらかすための身代わりの消費者といえるかもしれない。

### 3. ヴェブレンと進化論、ヴェブレンの進化論

『有閑階級の理論』で展開されているこうした分析を、既に述べたように、ヴェブレン自身は「さまざまな制度の進化についての経済学的研究」の実践例と考えていたようである。そもそも彼が出会った「進化論」とは、一体どのような思想だったのだろうか。

ヴェブレンが進化論思想と本格的に接触したのは、大学院時代のこととされている。ノルウェーからの移民の子として、アメリカ合衆国ウィスコンシン州の小さな開拓村で生まれ育ったヴェブレンは、隣接するミネソタ州の大学（カレッジ）で学んだ後、数学教師などを経て、最終的にイエール大学の大学院に移って哲学研究に従事する（1884年に博士号取得）。哲学を専攻した理由はよく分からないが、後年の研究・執筆活動に結実することになるヴェブレンのきわめて多種多様な関心が、当時一般的だった個別科学の専門区分にぴったり納まるようなものではなかったのかもしれない。このイエール大学で、当時新思潮として盛んに議論されていたのが進化論だったという。<sup>21)</sup>

進化論と一口に言ってもその理論構成はさまざまであり、ヴェブレンが接触した進化論が一体誰のどういう進化論だったのか（あるいは、一体誰のどういう進化論に近いものだったのか）、いろいろ言われてはいるものの、完全にこういうものだったと特定するのは難しい。<sup>22)</sup> とりあえず、時代背景その他から確実に言えることが二つある。

一つは、それは今日の進化論生物学が基調としている、「進化の総合理論 synthetic theory of Evolution」が成立する以前の進化論だったことである。進化の総合理論とは、ダーウィン (Charles Darwin: 1809-82) が『種の起源』<sup>23)</sup> (原書初版1859年) で確立した基本構想と、主に20世紀に入ってから大きく進展した遺伝学的知見の「総合」によって成立した理論であり、生物種に遺伝子レベルで生じる突然の変化をうまく説明できるように改良されている。これに対し、こうした総合理論成立以前の元々のダーウィンの進化論は、与えられた環境に生物種が無数の世代交代を経て「ゆっくり」適応していくという発想に基づいて構成されていて、たとえば突然変異のような、生物種が遺伝情報レベルで「いきなり」変わる可能性を理論構成上うまく取り込めていないことが指摘されている。<sup>24)</sup>

この点では、制度の進化を語るヴェブレンの理論構成も、私見では断絶よりも連続的推移を基調とした「ゆっくり進化論」の形をとっているように思われる。少なくとも『有閑階級の理論』を世に問うた時点でのヴェブレンは、かつてある社会階層 (狭義の「有閑階級」) に典型的かつ限定的に見受けられた行動類型が (特に産業革命以降の環大西洋経済圏の成長を受けて) じわじわと欧米社会の大半の階層に拡散・浸透していく様子を、息の長いタイムスパンで巨視的に跡付けようとしている。だからこそ『有閑階級の理論』はさまざまな時代や地域のさまざまな話題に各論的かつ網羅的に言及しなければ論旨を進めていけないような書き方で成り立っており、その結果、あまり穏当でない言い方をあえてするなら、話があちこちに飛んでだらだらと長ったらしいのである。<sup>25)</sup>

もう一つ指摘しておかなければならないのは、ヴェブレンの接した進化論が生物学の領域に限定された理論ではなく、最初から社会科学方面への応用が見込まれる理論と考えられていたことである。この点で、研究者たちも一致して指摘するように、スペンサー (Herbert Spencer: 1820-1903) の影響は見落とせない。スペンサーは今日顧みられることこそほとんどないものの、<sup>26)</sup> 19世紀後半の英語圏では進歩的な社会思想家として大変な名声を博していた人物であり、進化論的な発想に則りつつ (少なくとも本人はそう自称しつつ) 人類社会の生成発展の方向性を大胆に論じたことで知られている。その都度の環境条件に適合した形質をもつ個体が生き残って繁殖する、という進化論の基本思想を簡潔に表現した「適者生存 survival of the fittest」という言い回しは、もともとこのスペンサーが提唱し、ダーウィンがこれを受けて『種の起源』第5版 (1869) に取り込んだものである。<sup>27)</sup>

しかし、こうした指摘が正しいとすると、ヴェブレンの進化論理解はそもそもの初めから重大な問題をはらんでいたことになる。ダーウィン、スペンサー双方がそれに対してどれだけ自覚的であったのかはともかく、実は両者の「進化論」は、理論としての方向性が根本的に異なるからである。<sup>28)</sup> 具体的には、ダーウィンの進化論が進化という概念から規範的意味づけを極力削ぎ落として構成された、生命現象一般についてのかなり純度の高い記述理論 descriptive theory を志向しているのに対し、スペンサーの進化論にはそのような理論的禁欲が見られず、進化=進歩=よいことという、よくも悪くもまっすぐな思い入れに導かれた、社会現象一般についての規範理論 normative theory としての性格が濃厚である。<sup>29)</sup>

スペンサーの発想の起源は、ダーウィンよりもむしろ、ダーウィン以前のラマルク (Jean-Baptiste Lamarck: 1744-1829) が唱えた別系統の進化論に求められる。有名な「キリンの首はなぜあれほど長く進化したのか」という問いかけに対し、ラマルクは『動物哲学』の中で、キリン (の遠い祖先) たちが高い木の上の葉を食べようと努力した結果、頻繁に用いられた首が鍛えられて伸び (用不用説)、その伸び具合が世代から世代へと継承・蓄積されて今の姿になったと答えてみ

せる（獲得形質の遺伝）。<sup>30)</sup> 要するに、生物種はその都度の環境条件上そうなるべき方向に努力して進化を重ねていき、努力が十分なら（あるいは、あるべき進化の方向性に対して適切なら）その環境への適応度を増して生き残り、努力が足りなければ（あるいは、あるべき進化の方向性に対して不適切なら）適応しきれずに絶滅するというのである。生物たちに置かれた環境に適応する努力を要求し、適応の成功・失敗という結果をこうした努力（の有無・十分不十分・適切不適切）に遡及して説明しようとするラマルクの進化論は、今日の水準からすれば生物学的信頼性をほぼ完全に欠いているにもかかわらず、<sup>31)</sup> 大変困ったことに、社会的成功・失敗を当人たちのその都度の社会情勢・経済情勢への適応努力（の有無・十分不十分・適切不適切）の結果として説明しようとする、ある種の自己責任論との親和性が非常に高い。このため今日でも、進化論的言辞を駆使して人間の社会活動・経済活動を語ろうとする場合、そうした語りはややもすると「ラマルク＝スペンサー路線まっしぐら（吉川浩満）」の、粗雑な価値規範を最初から内包した非科学的で独断的な言説に終わりがねないのである。<sup>32)</sup>

こうした視点からヴェブレンの『有閑階級の理論』を見てみると、そこに現れる「さまざまな制度の進化についての」考察には、ダーウィンの進化論に顕著な価値中立的記述主義と、ラマルク＝スペンサー的進化論に顕著な（ただし、ラマルクやスペンサーと比べてきわめて悲観的な）暗黙の価値判断とが、微妙に混在している印象を受ける。次節で見るように、彼は一方では早急な価値判断を極力排除して、「あくまでも現代社会がどのようなものなのかを観察し、解き明かすため」、人類社会が現状に至った文明史的経緯の可能な限り客観的かつ忠実な記述に専念しようとする。<sup>33)</sup> しかし他方、彼はそうした分析的記述の結果として描き出された人類社会の現状、つまり「見せびらかしの消費」というかつて狭義の有閑階級に固有のものであった行動様式が「大衆に受容」されるまでに至った現状に対し、価値中立的な無関心を貫くことがどうしてもできない。むしろそうした「制度の進化」の方向性を「社会の産業効率を引き下げ、現代的な産業生活が要請する事態に対する人間性の適応を遅らせるように作用する」ものとして危険視するヴェブレンは、<sup>34)</sup> あの手この手で、人類を健全な生産的活動に向かわせる原動力としての「製作者本能 *instinct of workmanship*」の復権を説くに至るのである。

#### 4. 『有閑階級の理論』はどういう意味で「さまざまな制度の進化についての」研究なのか

##### 4.1 「制度」とは何なのか

ここまで特に掘り下げた説明もせずに用いてきたが、そもそも「制度の進化」という表現は誤解を招きやすい。わたしたちが制度 *institution* という言葉を聞いて真っ先に思い浮かべるのは、英語と日本語とを問わず、普通は社会制度 *social institution* のことだからである。しかし実際には、ヴェブレンはこの言葉を用いる際、もっとややこしいことを考えている。このことをまず『有閑階級の理論』本文に即して確認していきたい。

ヴェブレン自身の定義によると、『有閑階級の理論』が取り上げようとする制度とは、何よりもまず人間の頭の中に育まれる「思考習慣」のことである。「制度とは、実質的にいえば、個人や社会の特定の関係や特定の機能に関する広く行き渡った思考習慣なのである」と彼は言う。<sup>35)</sup> 人間の行動を縛るさまざまな社会的枠組みも制度（社会制度）と呼ばれるが、それらはみな、個人や社会のあり方に関する多かれ少なかれ社会的に共有された特定の思考習慣が外側に表出され、観察可能な形をとったものでしかないとヴェブレンは考える。つまりわたしたちが日常言語で制度と考えているこうした社会的構築物は、実は原因ではなく結果にすぎないというのである。

このような共有された思考習慣としての制度は、「環境が変化を強制しないかぎり、無限に持続する傾向をもって」おり、<sup>36)</sup> 逆に言えば「変化する環境とともに変わる」。<sup>37)</sup> これがヴェブレンの言う「制度の進化」である。この際くれぐれも注意しなければならないのは、こうした制度＝思考習慣の変化を促す媒体としての「変化する環境」が、それ自体制度の産物であるということである。ひとびとが特定の制度＝思考習慣に基づいて行う活動は、彼らを取り巻く環境を絶えず変化させていく。この意味で、人間にとって環境とは「人間的であると同時に非人間的」なものである。<sup>38)</sup> それは人間の制度＝思考習慣がそれによって規定されていく所与であるというだけでなく、制度＝思考習慣によって絶えず改変されていく対象でもあり、「制度」と「環境」はお互いにフィードバックを重ねつつ双方向的に進化していく関係にある。

この点でヴェブレンの制度の進化論は、生物学理論としての進化論（ここでは科学的裏付けを欠いたラマルクのそれではなく、ダーウィンのそれを念頭に置く）と一線を画すことになる。生物学的進化論の場合、進化とはその都度の所与としての環境に応じた生物種の進化であり、環境とそこに生まれ落ちた生物個体との関係は、双方向的でなく一方向的だからである。つまりダーウィン進化論の別名である自然選択説という名称が（自然を擬人化する危険をはらみながらも）示すように、自然環境が生き残る生物個体を「選ぶ」わけであり、生物個体の方が生き残りやすいように自然環境の側を選択的に改変することもなければ、所与の環境で生き残りやすいように自らの行動を選択的に変えることもない。生物個体は所与として固定された環境に、同じく所与として固定された自らの形質をもって向き合うだけであり、そしてその形質のわずかな変異に応じて、ある個体は生き残って繁殖し、別の個体は繁殖することなく退場していくのである。<sup>39)</sup>

#### 4.2 「制度の進化」の原動力は何なのか－製作者本能と、そのさまざまな変異

『有閑階級の理論』だけを視野に入れていると読み取りづらいが、ヴェブレンはこうした「制度の進化」の原動力として、製作者本能 *instinct of workmanship* なるものを想定している。製作者本能とは「すべての人間に内在する」根本的傾向性であり、それは「他の事情が許すかぎり、生産的な努力や人間が利用しうるものなら何でも好ましい、と思わせるように仕向け」、反対に「人間が物や努力の浪費を非難するように仕向ける」という。<sup>40)</sup> 要するに、ひとは誰でも心の底では、完全に無意味な活動に従事することには及び腰になるというのである。

ひとは確かに、少しでも生活に余裕ができれば、その余裕を無駄な消費行動という形で見せびらかそうとする。しかしだからといって、身の丈に合わないような規模の見せびらかしの消費を続けた挙句、自らの経済的生活基盤を掘り崩して自滅するような人は、皆無というわけではないにせよあまり頻繁には見かけない。それはヴェブレンによれば、製作者本能がいつかどこかでひとびとのうちに「一見して無駄だと分かるものに対して不快の念を抱かせたり審美的な拒否感を抱かせるような、普遍的な感覚」を呼び起こし、程よい歯止めになってくれているからだという。<sup>41)</sup>

『有閑階級の理論』は非製作者的な思考・行動類型の解明を主軸にすえた論考だから、製作者本能については局所的にしか言及していない。したがって『有閑階級の理論』だけを読む限り、製作者本能と「有閑階級という制度」がどういう関係にあるのかは非常に分かりづらい。ある箇所では、製作者本能の働きは「見せびらかしの消費という慣行とは無縁な、しかもある程度それと相反するような、別の作用」として説明されているから、<sup>42)</sup> ここを素直に読むならば、ヴェブレンは「制度の進化」の原動力を（少なくとも）二つ想定していると解される。<sup>43)</sup> その場合制度の進化は、その都度の環境特性に応じて、有閑階級の思考法（見せびらかしの消費を促進する）と製作者本能（見せびらかしの消費を抑制する）のせめぎ合いにより、しかもどちらかがどちらかを完

全に無力化してしまうことなしに進行していくことになる。

國分功一郎（1974-）はこうした二元論的理解に依拠しつつ、仕組まれた予定調和をそこ（＝どんな逆境でも決して無力化されない製作者本能！）に読み取り、製作者本能を削除してヴェブレンの説明図式を一元化するよう提案する。それによると、製作者本能とは、人類に無駄なことをして自滅してほしくないというヴェブレンの願望から「無理をして」ねつ造されたありもしない疑似防衛本能であり、彼の分析の客観性を「破綻」に導く危険を内包しているという。もし有閑階級の思考法に対する原理的歯止めが存在しないなら（そして國分は事実存在しないと考えているわけだが）、人類がそれに際限なくのめり込んで自滅していくような未来も十分ありうるだろう。しかしヴェブレンはそういう可能性を思い浮かべたくなかったからこそ、「有閑階級という制度」がどんなに隆盛を極めようとも完全には沈黙させられることのない「本能」を想定することにこだわったというのである。<sup>44)</sup>

第3節の末尾でも触れたが、ヴェブレンに「有閑階級という制度」を軽蔑する暗黙の価値判断が働いていたという國分の指摘はもっともであり、それが『有閑階級の理論』全体の論調を偏向させているというのも、おおむね妥当な指摘と言えらるだろう。しかし筆者は、製作者本能という発想を『有閑階級の理論』の説明図式から削除することは容易ではないと考える。この用語はヴェブレンの後年の著作でも一貫して用いられ続けており、<sup>45)</sup>もし『有閑階級の理論』単独での内的整合性を念頭に置いて削除してしまうと、今度はそれら他の著作と『有閑階級の理論』の間の整合性が危うくなりかねないからである。

たとえば『有閑階級の理論』から5年後に刊行された『企業の理論』（1904）でも、製作者本能という発想は、相変わらずヴェブレンの基本構想の核心部分を占めているように思われる。あえて簡単にまとめるなら、ヴェブレンがこの第二の単著で描き出してみせるのは、いわばひとつひとつの製作者本能が製作者本能であることを保ったまま、企業活動の中でその現象形態を変質させていく過程である。それは一方では、もともと製作者本能のストレートな発露としての「産業活動 industry」、つまり何らかの意味で有用なものを生産する活動に主眼を置いていた（はずの）企業が、<sup>46)</sup>生産効率の最適化を図るなかで「金もうけの企て business enterprise [= 営利企業]」そのものを自己目的化していく過程であり、また他方では、長期的かつ社会奉仕的な生産計画を製作者本能ののちで展開する「産業の指導者 captain of industry」であった（はずの）経営者が、やはり「金もうけの企て」そのものを自己目的化していくことで、短期的かつ反社会的な営利追求に走る「金もうけの指導者 captain of business」に変質していく過程ということになる。

もちろん、解釈を最終確定させるには、ヴェブレンのその他の著作とも詳細な比較検討を行わなければならない。しかし少なくとも、上述のような『企業の理論』の理論構成と『有閑階級の理論』のそれを統合的に読もうとするならば、筆者はむしろ一元論は一元論でも、國分の提案とは反対方向に一元化された理論を想定した方がうまくいくように思われる。つまり製作者本能を切り捨てて有閑階級の志向一本ですべてを説明し切ろうとする一元論ではなく、逆に有閑階級の志向さえも製作者本能的説明図式の枠内に組み入れた、いわば製作者本能の一元論である。つまり見せびらかしの消費行動に代表的に表現されている「有閑階級という制度」を、製作者本能に対立する別の原理ではなく、製作者本能という根本原理の（たとえどんなに複雑に屈折した形であっても）一変異にすぎないものと位置づける一元論である。

本能という強い言葉を混ぜ込んでいるから奇妙に響くものの、「製作者本能」という言い回しを用いてヴェブレンが主張している内容そのものは、実はそれほど不合理ではない。人間が遺伝情報に厳密にプログラムされた行動パターンをもたず、多かれ少なかれ自立的な思考によって行動

を決めていかなければならない特殊な生物である以上、いかなる点においても実行する意味がないと見なしていることを実行することは、人間には論理的に不可能だからである。逆に言えば、人間の行動には常にそれを正当化する「意味」が伴うし、「意味」のないことを人間は実行したがない（というかそもそも実行できない）。製作者本能という発想の根幹を言語化すれば、おおよそ以上になるだろう。

どのような行動に「意味」を見出すことができるかは、本人の資質に加えて、その都度の環境条件にも左右される。たとえば食料獲得効率の劣悪な社会に暮らす人が、食料獲得に直結しない行動に「意味」を見出すことは困難だが、食料が豊かな社会ならそれほど困難ではない。したがって「製作者本能」も、その都度の環境条件下で誰がどのような行動に「意味」を見出すかに応じて、さまざまな変異を示すようになる。有閑階級的な思考様式も、製作者本能が示すこうしたさまざまな変異の一形態であり、それは生産活動が色々な意味で不安定な前近代社会ではごく限られた上層の人たち（＝社会階層としての狭義の有閑階級）だけに発現するレアな変異形態だったが、人類社会が総体として急速な経済成長を経験した近代以降、好都合な環境条件を受けて急速に拡散するに至った。このように理解するなら、ヴェブレンの処女作『有閑階級の理論』とその後の思索および著作活動は、その理論構成のあり方に大きな矛盾や飛躍を想定しなくても無理なく接続するものと思われる。

## 5. おわりに—ソーステイン・ヴェブレンは猫を飼っていたか

厳密な意味での身代わりの消費者にペットを含めることができるかという、実は少し怪しい。第2節でその一端を示したように、『有閑階級の理論』には身代わりの消費者たちの雑多な例が挙がっているが、書かれた時代が時代だけに、さすがにそこにペットは含まれていないからである。また、ヴェブレンの言説を厳密に解するなら、身代わりの消費はその純度が高くなればなるほど、身代わりを務めている者自身に快楽よりもむしろ苦痛をもたらすようになるという。身代わりはあくまで身代わりであり、彼らが行う消費は「決してめだつほど身代わりの消費者自身の快適さに役立ってはならない」からである。<sup>47)</sup> コルセットでぎちぎちに締め上げられた上から豪華な夜会服を着せられた女性や、身体の動きを著しく制限する豪華な法衣を着せられた聖職者（「聖職者の祭服は高価で装飾的で、しかも不自由inconvenientである」<sup>48)</sup>）などがその典型だが、高級ペットフードや高度な医療サービスを楽しむペットたちがこのような苦痛を味わっているとは思えない。

とはいえ、わたしたちは『有閑階級の理論』より120年近く後の時代にいる。現代の、特に先進産業国では、清々しいまでに実用とかけ離れた側面でペットに金をかける飼い主たちも決して少なくない。たとえばまだ残暑の厳しい時期に、自前の毛皮の上からどう見ても必要とは思えない衣服を重ね着させられている近所の犬や猫をみるたびに、あれは本人（ひとではないが）たちにとってさぞかし苦痛なのではないかと思ってしまう。

犬猫に話が戻ったついでに、ヴェブレンが『有閑階級の理論』のあちこちで行っているトリヴィアの考察の中から、一つを紹介して稿を終えることにしたい。『有閑階級の理論』第6章では「産業的な用途に役立たない飼育動物」つまりペットの代表格として犬と猫を挙げ、どちらが他人に見せびらかすために好都合かという、非常にどうでもいい問題を大真面目に論じている。<sup>49)</sup> 結論から言うと、彼は猫ではなく犬に軍配を上げる。犬がいいというより猫がダメだという主張に力点が置かれているのだが、ダメな理由が大変面白い。

「猫は、あまり浪費的でないがゆえに犬や駿馬よりも名声の点で劣るし、場合によっては有用な目的に役立つことさえある。同時にまた、猫の気性は名誉を与えるという目的には不向きなところがある。猫は人間と同格のものとして生きるのであって、あらゆる価値、名誉および名声に関する区別の古代的な基礎である身分関係にまったく関知せず、結果的に、飼い主やその親しい人々との間で妬みを起こさせるような比較を行う、という用途にまったく役立たない」<sup>50)</sup>

圧縮された文章なので、丁寧に読み解く必要がある。もちろん品種にもよるが、一般に猫は犬や馬よりも少ないエサで済む。ということはエサ代がかさまないから「あまり浪費的でなく、したがって犬や馬と比べて、金のかかる生き物を道楽で飼っているというアピールに使いがたい。「名声の点で劣る」とは、どうやらそういう意味らしい。

おまけに猫は、ネズミやモグラといった身近な害獣を駆除してくれるから、「場合によっては有用な目的に役立つことさえある」。つまりこの点でも、金銭的余裕にまかせて道楽で飼われている無駄な動物とは言いづらいというのである。

さらにヴェブレンは、猫という動物の「気性」そのものがペット自慢には向いていないと言いたいようである。というのも、「猫は人間と同格のものとして生きる」つまり飼い主と自分を同格だと思っているので、そもそも飼い主を敬うようなそぶりを全く示さない。こうした猫と飼い主の関係は「身分関係」つまり飼い主を上位に置く上下の関係になっていないので、ペットとしての猫が、それを傍目に見ている「親しい人々」に「妬みを起こさせる」ことはない。要するに、猫など飼っていても誰にもうらやましがられないというのである。

これに対し、見せびらかすためのペットとしての犬の効能は大いに認められている。ただし、認め方が色々とひどい。<sup>51)</sup>

「犬は、役立たないという点だけでなく、特別に恵まれた気性の点でも〔ペットとしての〕利点をもっている。…この意味するところは、犬が人間の召使いであること、それに、絶対的に服従する能力や、俊敏に主人の機嫌を察知する能力をもち合わせていることである」

「犬は、飼育動物のうちで、それ自体として最も下品なものであり…主人に対する追従的でへつらうような態度や、主人以外の人に対しても危害や不安を与えることによって、つねに欠点を埋め合わせようとする」

犬が「役立たない」というのは、一見すると奇妙な理屈である。家を守る番犬や狩猟の供としての猟犬は、猫と比べてよほど役に立っているように思われる。しかしヴェブレン的に考えると、番犬などただ門前で吠えているだけで実際の戦力になっていないし、また猟犬については、そもそも狩猟そのものが（少なくとも近代の欧米社会においては）真剣な食糧獲得活動とは縁の切れた遊戯となり果てている。<sup>52)</sup> このような遊戯化した狩猟は、ヴェブレンによれば確かに「賞賛に値する仕事であり、尊敬に値する略奪衝動の表出」だが、<sup>53)</sup> もはや食肉を得るための肉体労働ではなく、むしろ有閑階級がひま（と不毛な闘争心）を見せびらかすために行う無用の営みである。したがって、狩猟という無用なことに役立つよう交配を繰り返された猟犬という存在は、裏を返せば、無用でないことには役立っていないのである。

これに加えて、犬の「気性」は「追従的」であり、いつも飼い主の機嫌を目ざとくうかがってはこれに「絶対的に服従」しようとする。つまり猫と違って、犬は飼い主を常に自分の上位者＝

主人として立ててくれるし、主人に対して時には卑屈なまでに「へつらう」。しかも「主人以外の人」にはいつでも吠えかかって「危害や不安を与える」ことで主人の留飲を下げてくれるから、普段の振舞いが多少卑屈で「下品」でも、その「欠点」は「埋め合わ」されるといふ。

まとめると、犬は

1. 少なくとも猫と同程度か、悪くするとそれ以上に実用上の役に立たない
2. 猫と違い、卑屈なまでに飼い主への従属的態度（と、飼い主でないものへの攻撃的態度）を示す

というこの2点において、周囲に見せびらかすためのペットとして猫よりも適しているというのである。こういう見地からペットとしてのあり方を肯定されることが、犬にとって名誉なことかは疑わしい。

ヴェブレンの文章は明らかに、犬に対する冷淡な軽蔑と、猫に対する屈折した愛情にあふれている。誰がどう見ても、生涯のある一時期、身近なところに猫がいた経験のある人の文章である。それでは、ソーステイン・ヴェブレンは猫を飼っていたのだろうか。飼っていたとしたら、それは彼の生涯のいつ頃のことだろうか。

結論から言うと、残念なことに、まるで分からない。ヴェブレンにまつわる伝記的事柄を調べようとすれば、ドーフマンの浩瀚な評伝（[Dorfman: 1934]）を参照することが欠かせないが、ヴェブレンの生涯を彩るさまざまな人間関係については膨大な情報を与えてくれるこの古典的評伝も、ヴェブレンと人間でないものとの関係についてはほぼまったく触れることがない。<sup>54)</sup> また、1950年代にヴェブレンの娘アンと個人的に親交のあった宇沢弘文は、<sup>55)</sup> ヴェブレンに関する伝記的情報について独自のソースを有していたはずだが、この人もまた、ヴェブレン家のペット事情については何も書き残していない。

そういうわけでごく常識的な推測になってしまうが、ヴェブレンが生まれ育った北米大陸の開拓農村で、猫が飼われていなかったはずがない。収穫した穀物等を貯蔵するにあたり、収穫物を狙うネズミ等の小動物が出現することはほぼ必然である以上、そうした小動物を狩ってくれる猫の存在もまた必要不可欠であったと思われるからである。家庭ごとに飼うにせよ、村で共有するにせよ、幼少期のヴェブレンは開拓村のあちこちを闊歩する猫の姿を見ていたに違いないし、そうした猫たちが「有用な目的に役立つ」瞬間もやはり一度ならず目撃していたことだろう。猫は自分の仕留めた獲物を、ひとの迷惑を一切顧みず、見せびらかしに来る動物だからである。

大学進学と同時に故郷を後にしたヴェブレンは、大学町から大学町へと意に沿わぬ放浪を繰り返したその後の人生のどこかで、自分をちっとも敬わない猫たちに癒される機会を再び得られたのだろうか。いずれ筆者よりも真面目な誰かが解明してくれることを祈りつつ、この実用上の役に立たない論考を終えることにしたい。

## 注

- 1) 本稿は去る2018年10月3日、2018年度第2回東京国際大学人文・社会学ファカルティセミナー（東京国際大学第1キャンパス）で発表された講演原稿「ソーステイン・ヴェブレンは猫を飼っていたか——現代日本社会における『身代わりの消費』とその担い手たち」に、加筆修正を施したものである。
- 2) もっとも、2018年9月1日現在の高齢化率（全人口に占める65歳以上人口の割合）を川崎市ホームページ（<https://www.city.kawagoe.saitama.jp/>）上のデータに基づいて独自に計算してみたところ、霞ヶ関地区で特に高齢化が進んでいるという結果は得られなかった（市全体で26.26%、霞ヶ関地区で25.25%）。これは推測の域を出ないが、同地区にここ数年で爆発的に増えた留学生等の外国籍の住民が、統計上の高齢化率を一時的に押し下げていると思われる。

- 3) 一般社団法人ペットフード協会 (<http://www.petfood.or.jp/>) が行った平成29年(2017年)全国犬猫飼育実態調査によると、「犬全体の平均寿命は14.19歳, 猫全体の平均寿命は15.33歳」と報告されている。厳密な定点観測的調査になっていないため単純比較はできないものの、2010年の類似の調査と比べても犬で0.29歳, 猫に至っては0.93歳と、急速な上昇を続けているのが分かる。また正確なソースが不明なため全面的な信頼は置けないが、同協会の会長談話の中に「昭和58年 [= 1983年] の独自調査では、犬の平均寿命は7.5歳」という発言が見られる。仮に本当だとすると、犬に関してはここ30年余りで倍近くまで寿命が延びたことになる。
- 4) 前注で参照した2017年の統計によると、犬に関する支出総額が飼育世帯平均で医療費等含めて月額10,818円, 猫の場合7,475円とされている。
- 5) [Taka: 1998] p. 456.
- 6) 以下、本稿独自の訳語として、それぞれ「見せびらかしの消費 conspicuous consumption」「身代わりの消費 vicarious consumption」を用いることにする。前者はいくつかある『有閑階級の理論』の邦訳では訳語が定まらず、「顕示的消費(高哲男)」「誇示的消費(宇沢弘文)」「衒示的消費(小原敬士)」などさまざまに訳出されているが、conspicuousの語源となったラテン語 conspicio の原義「みんなで眺める→(受動相) みんなから眺められる」を生かし、「見せびらかしの消費」とした。これに対し、後者の邦訳語はおおむね「代行的消費」で一致しているが、「見せびらかしの消費」と語感をそろえるため「身代わりの消費」とした。
- 7) ただしこの「進化 Evolution」という語は1902年5月の増刷分から削除され、以後の版では単に「さまざまな制度の経済学的研究」となっている。ヴェブレン(高哲男訳)『有閑階級の理論 増補新訂版』講談社学術文庫, 2015年, p. 6を参照。
- 8) [Veblen: 1899] p. 1. (邦訳p. 11)
- 9) この「制度」という言い回しについては、第4節で改めて取り上げる。
- 10) [Veblen: 1899] p. 38. (邦訳p. 51-52)
- 11) もちろん、肥満が経済的余裕を見せびらかす表徴たりうるかどうかは、時代や地域条件に左右される。たとえば、生活に余裕のない人ほどジャンクフードその他の高カロリー食であつという間に肥満してしまう21世紀の先進産業社会であれば、逆にカロリー控え目の高級食材を日々摂取し、高級フィットネスクラブで定期的にカロリー消費に励んで痩身を保つといった生活スタイルこそ「余裕」の象徴になるはずである。
- 12) [Veblen: 1899] p. 75. (邦訳p. 89, ただし訳文を一部変更)
- 13) *Ibid.* (ただし訳文を一部変更)
- 14) *Ibid.* p. 74. (邦訳p. 88)
- 15) *Ibid.* p. 75ff. (邦訳p. 89-90)
- 16) *Ibid.* p. 59ff. (邦訳p. 73ff.)
- 17) *Ibid.* p. 71. (邦訳p. 85ff.)
- 18) *Ibid.* p. 71ff. (邦訳p. 86ff.)
- 19) *Ibid.* p. 119ff. (邦訳p. 136ff.)
- 20) *Ibid.* p. 112ff. (邦訳p. 129ff.)
- 21) 以下、伝記的事項は特別な断りのない限り [Dorfman: 1934] による。
- 22) ドーフマンを始めとする伝記作者たちは一致して、スペンサー(後述)の北米への紹介者として知られており、当時イェール大学で教えていたサムナー(William Graham Sumner: 1840-1910)の影響を指摘している。この指摘はきわめて妥当なものではあるのだが、そこで話は終わらない。スペンサー思想の受容も解釈も、決して一枚岩ではなかったからである。
- 23) 進化論理解の本質にはまったく関わりのないことだが、邦訳名を『種の起原』(岩波文庫版ほか)とするか『種の起源』(光文社古典新訳文庫版ほか)とするかをめぐり、翻訳史的に厄介な論争が持ち上がっている。詳細は [Setoguchi / Kijima: 2012] を参照。本稿では、少しややこしくなるが、邦訳の参照基準としては原書初版から第6版までの異同が分かりやすい岩波文庫版(つまり『種の起原』)を採用し、表記としては日常語としてより馴染みのある「種の起原」を採用する。
- 24) たとえば [Illies: 2006] S. 91-93を参照。ただし、これはあくまで後付け的な指摘でしかなく、ダーウィ

- ン自身は自説のこうした難点を特に意識していなかったし、そもそも意識する必要がなかったと思われる。上記の観点からダーウィンの進化論の見直しが図られるようになったのは、ダーウィンの没後、彼が生前見落としていたメンデル (Gregor Mendel: 1822-1884) の業績が3人の生物学者によって再確認され (1900)、さらにそのうちの一人ド・フリース (Hugo Marie de Vries: 1848-1935) によって、突然変異という現象が初めて生物学的な報告・検討の対象として取り上げられてからのことだからである (1901)。
- 25) ヴェブレンの名誉のために付け加えておくと、実は後年のヴェブレンは20世紀遺伝学の成果を自説に取り入れようと努めており、たとえば上述の突然変異のような現象についても、1901年のド・フリースの報告から程ない時期に熱心に調べていた形跡が指摘されている ([Hodgson: 1993] 邦訳p. 189)。こうした作業によってヴェブレンの思考のスタイルが多少なりとも変化した可能性は大いにあるが、筆者は現時点では『有閑階級の理論』後のヴェブレンの著作について網羅的に語れる状態にないため、断言は避けておく。ただし、少なくともはっきり言えるのは、1899年刊行の (つまり必然的に19世紀の「突然変異なき進化論」に依拠せざるをえなかった) 『有閑階級の理論』という著作に、(その機会は十分あったにもかかわらず) ヴェブレンが後年大きな修正を加えることは遂になかったということである。仮に後年のヴェブレンの進化論理解が、19世紀の進化論から20世紀の進化論理解に「進化」していたとすると、1902年5月増刷分の『有閑階級の理論』で副題から「進化」の一語が削られたことにも (第1節注7参照)、実は大きな意味が隠されているのかもしれない。
- 26) ただし近年、スペンサーが「社会進化」の指標として政治的自由だけでなく経済活動の自由の認知・浸透度を重視していたことに着目し、彼を現代北米の法・政治哲学に隠然たる影響力をもつリバタリアニズムLibertarianismの遠祖として再評価しようとする動きが確認されている。詳細は [Morimura: 2017] を参照。
- 27) 『種の起原』岩波文庫版邦訳、上巻p. 445を参照。
- 28) そもそもスペンサーの社会思想は『種の起原』刊行以前からほぼ固まっており、刊行前 ([Yasugi: 1994] p. 207-215) と刊行後 (*Ibid.* p. 221-249) の論考を読み比べてみても、細かな用語が「ダーウィン寄り」に変更されていることを除けば、本質的な点で主張が変化した痕跡は確認できない。
- 29) 20世紀倫理学史にいわゆる「メタ倫理学」の開祖として足跡を残したムーア (George Edward Moore: 1873-1958) は、彼を一躍有名にした「自然主義の誤りnaturalistic fallacy」を犯している典型的思想家の一人として、当時名声を博していたスペンサーを槍玉にあげている ([Illies: 2006] S. 182ff. および [Yoshida: 2008] p. 381ff. を参照)。自然主義の誤りとは、自分があらかじめ有している価値基準に無自覚なあまり、価値中立的・記述的な事実から「自然に」つまり「科学的に」規範的価値を導出できたと錯覚してしまう誤りのことである。
- 30) [Lamarck: 1809] 邦訳p. 141-142を参照。ちなみにラマルクの原文では、キリンは進化の過程で首と前脚が長く伸びたと論じられている。高いところの葉を食べるには、首をのばすだけでなく、始終前脚で背伸びをしている必要があったからだという。
- 31) 獲得形質の遺伝は今日に至るまで立証されていない。
- 32) [Yoshikawa: 2014] p. 169参照。なお、ヴェブレンの進化論理解が具体的にどの程度「ラマルク・スペンサー路線」に即したもののかについては、論者たちの間でも見解が分かれている。たとえば次節(4-2)で取り上げる國分功一郎 ([Kokubun: 2011]) は、『有閑階級の理論』の理論構成の中に、かなり強固な目的論的偏向を読みとろうとする。筆者はこれに対し、同じく次節で示すような解釈に徹するなら、ヴェブレンの「進化論」がもつ目的論的な臭みは最小限に抑えられるのではないかと考えている。
- 33) [Taka: 1998] p. 458.
- 34) [Veblen: 1899] p. 244. (邦訳p. 268-269)
- 35) *Ibid.* p. 190. (邦訳p. 214)
- 36) *Ibid.* p. 191. (邦訳p. 215)
- 37) *Ibid.* p. 190. (邦訳p. 214)
- 38) *Ibid.* p. 189. (邦訳p. 213)
- 39) ビーバーがダムを造って川をせき止めたりするのは自然環境の選択的改変ではないのか、という反論もあるかもしれないが、そもそも生物個体のもつ形質というのは本能的に決まった行動型まで「込み」で

理解される必要がある。ビーバーの場合、「川岸近くの目についた樹木を片端からかじり倒して巣をつくる」という形質は、所与として固定されている。したがって、たとえ川岸の樹木が何らかの事情で減少しても、ビーバーは木をかじって倒すことを止めないし、そもそも止められない。可変的な制度＝思考習慣に基づいて環境を改変することも (ex. 木が減ってきたから川岸に植樹して増やそう!), 環境の変化に応じて制度＝思考習慣を変化させることも (ex. 木が減ってきたから、これからは巣の材料を樹木以外のものでも済ませるようにしよう!), ビーバーにはできないのである。

- 40) *Ibid.* p. 93. (邦訳p. 108)
- 41) *Ibid.* (邦訳p. 109)
- 42) *Ibid.* (邦訳p. 108, 下線部強調吉田)
- 43) 古典的な研究としては、たとえば [Ohara: 1965] がこうした解釈を自覚的に前面に出し (p.53ff.), その後のヴェブレンの著作も「二元論」で読み解こうとしている。
- 44) cf. [Kokubun: 2011] p.107-109. なお、以下で検討する製作者本能捏造疑惑説は、元々アドルノ (Theodor W. Adorno: 1903-1969) のヴェブレン批判の中に登場した論点の一つを、國分が独自に展開したものである (cf. [Adorno: 2003] S. 89ff. (邦訳p. 124)). ナチスの台頭により心ならずも渡米を余儀なくされたアドルノが、高度に発達したアメリカの産業資本主義社会に対する嫌悪を隠そうとしなかったことは有名なが (cf. [Scheible: 1989] S. 94-103), 似たような嫌悪を共有していたヴェブレンに対しては「文化の弁証法的両義性を理解していない」という理由で近親憎悪的な攻撃に終始している。
- 45) 後年のヴェブレンには、そのものずばり『製作者本能、およびさまざまな産業技術の現状 The Instinct of Workmanship, and the State of Industrial Arts』(New York, 1914) という論集もあるが、未検討のため言及は控えることとする。ただしこの論集も「人間本来の基本的性向としての製作者気質の本能 [= 製作者本能] が、近代産業社会の中で歪められ…逆に極めて反人間的な帰結をもたらしていること」を強調していると言われるため ([Uzawa: 2000] p. 102), これがもし正しいとすると、筆者が本節で提示する「製作者本能の一元論」という解釈を裏づけてくれるものと思われる。
- 46) [Veblen: 1904] p. 41ff. (邦訳p. 35ff.)
- 47) [Veblen: 1899] p. 120-121. (邦訳p. 138, ただし訳文を一部変更)
- 48) *Ibid.* p. 121. (邦訳p. 139)
- 49) *Ibid.* p. 140ff. (邦訳p. 159ff.) なお、ヴェブレンは正確には犬と猫と馬を比較しているのだが、馬については紙幅の都合上割愛する。
- 50) *Ibid.* p. 140-141. (邦訳p. 159-160)
- 51) *Ibid.* p. 141. (邦訳p. 160)
- 52) *Ibid.* p. 40-41. (邦訳p. 52-53)
- 53) *Ibid.* p. 141. (邦訳p. 161)
- 54) そもそも、索引に猫 cat という項目が存在しない (ちなみに犬 dog も存在しない)。
- 55) cf. [Uzawa: 2000] p. 2-6.

## 引用・参考文献

- Adorno, Theodor W.: *Veblens Angriff auf die Kultur*. In: *Theodor W. Adorno. Gesammelte Schriften. Bd.10.I*. Frankfurt am Main (Suhrkamp), 2003. S. 72-96. [Adorno: 2003]  
 (アドルノ「ヴェブレンの文化攻撃」『プリズメン』ちくま学芸文庫, 1996年, p. 99-135)
- Darwin, Charles: *The Origin of Species by Means of Natural Selection or the Preservation of Favoured Races in the Struggle for Life*. London (John Murray), 1872 (6.ed.). [Darwin: 1872]  
 (ダーウィン『種の起原』岩波文庫, 全2巻, 1990年)
- Dorfman, Joseph: *Thorstein Veblen and His America*. New York (The Viking Press), 1934. [Dorfman: 1934]  
 (ドーフマン『ヴェブレン: その人と時代』ホルト・サウンダース・ジャパン, 1985年)
- Hodgson, Geoffrey M.: *Economics and Evolution. Bringing Life Back into Economics*. Oxford (Blackwell), 1993. [Hodgson: 1993]  
 (ホジソン『進化と経済学』東洋経済新報社, 2003年)

- Illies, Christian: *Philosophische Anthropologie im biologischen Zeitalter. Zur Konvergenz von Moral und Natur*. Frankfurt am Main (Suhrkamp), 2006. [Illies: 2006]
- 國分功一郎『暇と退屈の倫理学』朝日出版社, 2011年. [Kokubun: 2011]
- Lamarck, Jean-Baptiste: *Philosophie Zoologique*. Paris, 1809. [Lamarck: 1809]  
(ラマルク『動物哲学』朝日出版社, 1988年)
- 森村 進「訳者解説 なぜ今スペンサーを読むのか」森村 進(編訳)『ハーバート・スペンサーコレクション』ちくま学芸文庫, 2017年, p. 427-459. [Morimura: 2017]
- 小原敬士『ヴェブレン』勁草書房, 1965年. [Ohara: 1965]
- Scheible, Hartmut: *Theodor W. Adorno*. Reinbek (Rowohlt), 1989. [Scheible: 1989]
- 瀬戸口烈司, 木島泰三「『種の起原』か, 『種の起源』か——On the Origin of Speciesの日本語タイトル」『深田地質研究所年報』第13号(2012年), p. 1-11. [Setoguchi / Kijima: 2012]
- 高 哲男「訳者解説」ヴェブレン(高 哲男訳)『有閑階級の理論』ちくま学芸文庫, 1998年, p. 435-460. [Taka: 1998]
- 宇沢弘文『ヴェブレン』岩波書店, 2000年. [Uzawa: 2000]
- Veblen, Thorstein: *The Theory of the Leisure Class. An Economic Study in the Evolution of Institutions*. New York (Macmillan), 1899. [Veblen: 1899]  
(ヴェブレン『有閑階級の理論』ちくま学芸文庫, 1998年)
- Veblen, Thorstein: *The Theory of Business Enterprise*. New York (Charles Scribner's Sons), 1904. [Veblen: 1904]  
(ヴェブレン『企業の理論』勁草書房, 1965年)
- 八杉龍一(編訳)『ダーウィニズム論集』岩波文庫, 1994年. [Yasugi: 1994]
- 吉田量彦「理性の倫理は生き残れるか」慶應義塾大学日吉紀要『人文科学』第23号(2008年), p. 379-386. [Yoshida: 2008]
- 吉川浩満『理不尽な進化 遺伝子と運のあいだ』朝日出版社, 2014年. [Yoshikawa: 2014]